

美しい故郷 向こう三軒両隣クリーン三昧

清掃活動（①町内会清掃②地元高校生との海岸清掃③道路アダプト事業）に積極的に参加している。活動を通じて、地域の美化活動の貢献だけでなく、地域との交流、そして地域の方々の障害者理解に貢献している。

社会福祉法人 **ほかにわ共和国**

〒859-2606 長崎県南島原市加津佐町甲5718番地

TEL：0957-87-2347 / FAX：0957-87-2197 / E-Mail：hokaniwa@isis.ocn.ne.jp

【法人の概要】

法人設立年：平成17年11月11日（旧八幡会昭和36年設立より分割）

経営施設、事業（数）：4施設 14事業

経営施設、事業（種別）：

知的障害者更正施設…1 / 知的障害者通勤寮…1 / デイサービス…1 / 知的障害者通所授産…1 / 知的障害者地域生活事業…8 / 精神障害者地域生活事業…2 / 居宅支援事業 / 地域活動支援センター

【法人の理念・経営方針】

共汗共育 共に汗し、共に育つ オンリーワンの個性豊かな自分を求め一緒に感度できる心と人づくりを目指す

地域共生 社会資源としての地域貢献 老若男女誰もが気軽に集まり話せる場・生活の場となる

終生拡大家族構想 共に生きる仲間も「家族」生活し活躍する場所（地域）も「故郷」家族や故郷はここに 있습니다

至誠通天 「誠を以て事にあたれば神に通じる」職員は公明正大な差別のない支援で独創性を展開する

3安プラス1安 安心・安全・安定+安価で顧客満足度の高いサービス

4Hプラス3H ハート ヘッド ハンド ヘルス+ヒューマン ユーモラス ハッピーネス

実施施設の概要

施設名：知的障害者八雲寮 地域生活支援事業悠和里 知的障害者通勤寮

施設種別：知的障害者更正施設、知的・精神障害者地域生活施設

活動開始年：1970年（昭和45年）

活動の頻度・時間：① 自治会の清掃活動は早朝2時間月1回定例

② 高校生の海岸清掃海開き前日午後3時間年1回

③ 道路アダプト事業隔月午前中3時間

活動の対象者：知的障害者入所及び地域住民と高校生

活動実施の背景、実施にいたった理由

昭和42年知的障害児童施設の増設計画で精神薄弱児童（当時の呼称）に作業指導を取り入れた職業センターとしての開設は画期的なことであったが、まだ地域社会の人達には「知的障害児施設は怖い所、知的障害者は動作が遅くて汚い」という風評が大勢を占めていた。

昭和45年知的障害者更正施設八雲寮が隣接地に創設されたが、地域との交流を重点目標で自治会の清掃活動には積極的に参加し、田舎でいう道路改修などの「苦役（くやく）」等にも施設挙って協力体制で臨み、共に汗を流し共に育つ「共汗共育」の理念を実践した。しかし、地域福祉は山間の清水が田畑を潤す「水穴流満」が如く、日本古来の地域福祉の原点「向こう三軒両隣」の基本は清掃活動に施設が大いに関わることによって、特に高齢化の進む地域においては「知的障害者理解の和」の構築に効果的手段である。

実施内容

①地域生活者（グループホーム）と町内会清掃の実践

施設利用者が地域に雇用され通勤寮を利用しながら生活をする中で、所属する自治会の奉仕作業に全員が参加することによって、障害者の働きぶりに感動する人も多くなり、施設を出て地域生活者として所属する自治会でも隣人として受け入れられ、障害者自立支援による障害者が街で暮らす事への抵抗感を無くす状況を創出した。

②地元高校生との海岸清掃

昭和45年八雲寮が創設され、増設された1973年（昭和48年頃）から地元の高校一年生と汗を流す行事となり、この活動は自然環境問題も含めた学校行事としては県内で高く評価され長崎県教育史にも紹介されている。

③県委託事業道路アダプト事業

長崎県は国道を美しく保つため平成17年「道路里親制度」道路アダプト事業^{*}を一般に募ったので、我がほかにわ共和国は一番に手を挙げ、施設への入り口から1.5キロの国道251線の里親になり、隔月毎の奉仕活動に汗を流している。

※道路アダプト事業…身近な道路で管理者（県や市）と協働して清掃や除草などを行い、美化意識の向上と地域コミュニティの活性化を図ることを目的としている。

活動効果

長崎県は日本一長い海岸線を持つ県で、30年も前は美しい海岸であった海が年々汚染され、最近自然環境についての啓蒙活動もされるようになり、この地道な活動が地域の人達に評価され始め季節的に市は臨時職員を雇用し、海岸の美化に力をいれるようになってきた。

継続は力なりの格言のように、町内の高校生は幼稚園の頃から施設に出入りして、小学生や中学生になると自分たちの運動会に知的障害者が参加したり、施設の行事に数多くの関わりを経験し、自らがボランティアとして参加した者も多くいるので、共に汗することは平気で楽しく会話など交わしながら奉仕活動をしている。入学したばかりの高校一年生の中には知的障害者への理解度が低く、作業も不真面目にする生徒も少なくないが、理解度の低い友達にたいしてリードする形で輪を作っている。このことは、海岸清掃はいい汗ボランティアで「たかが清掃三昧・美化運動、されど清掃三昧・地域福祉の基本なのだ」ということを示唆しているのかも知れない。

今後の課題

当法人の地道な清掃活動は地域雇用の一環として、公園管理や公共施設の契約管理作業に結びつき、これらの作業に従事していた障害者が社員となって、5年前有限会社「ほかにわステーション」を設立し、組合員の福祉的雇用ソーシャルファームの原型をスタートさせた。

福祉業界の中でも生産性を追求している昨今にあって、本来の福祉事業家と株主会社等の企業型福祉との違いは「何なのか」の問いに、その違いをあえて表現するならば、街づくりの一角に福祉の当事者や知的障害者も加わり、「福祉と教育と環境の問題を有機的に連動する実践をすること」ではないかと思うのである。

そして、福祉経営者はこのコラボレート（連動）できる力を培い、幸福感達成のソーシャルデザインすることが今後の課題である。

